

なかしべつ観光情報

見る・遊ぶ



スノーシューハイキング、フォトツアー、星空ウォッチング、乗馬、アドベンチャーカウベルツアー、レンタサイクルなどの情報



泊まる



湯宿、ホテル、ビジネスホテル、旅館、温泉付き宿泊施設などの情報



食べる



そば、イタリアン、中華、食堂、寿司、お好み焼き、うどん、パン、カレー、カフェ、ジンギスカン、焼肉、居酒屋、アイス、お土産などの情報



温泉



温泉の素・中標津6つの旅湯、日帰り温泉マップ、養老牛温泉、温泉+αで楽しむ、などの情報



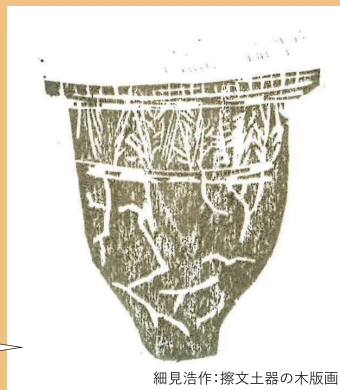
知^{vol.2}つとく・しるべ

細見 浩

1936(昭和11)年:上川郡上川町出身

1961(昭和36)年:根室管内中標津町で教諭として勤務
2018(平成30)年:逝去

新世紀美術協会、北海道版画協会などの会員として活躍した版画家。教鞭を取る傍ら、生徒に木版画などを教えながら、道東の四季の移り変わりを多色刷りによる独自の技法により、多くの作品を遺しました。その一方で、土器などの古いものも木版画で作成されています。



細見浩作:擦文土器の木版画

[発行年] 2025年3月
[発行者] 中標津しるべつなぎ会

(事務局:中標津町教育委員会社会教育課芸係)
中標津町丸山2丁目22番地
ダイヤルイン 0153-74-0175



中標津町のホームページからも
中標津しるべめぐりを
閲覧することができます。



中標津 しるべめぐり

N43°
E144°

中標津の歴史と文化をさまざまな視点から探る

古代～近世編



縄文時代から続く森と川

山々から大地に注がれる水流が、 縄文時代から人々の暮らしや豊かな森を育む

古代集落遺跡やアイヌ文化期のチャシ跡は、知床の山々に連なる武佐岳や標津岳をはじめ、山々から流れる標津川や当幌川などによって形成された河岸段丘に立地し、河畔林沿いに分布しています。その川名のほとんどがアイヌ語由来の地名で、特に「標津川」は2つの語源に由来しているとおり「大きな川」、「鮭がたくさんいる川」など、アイヌの人々の暮らしと密接に関わっており、縄文時代より母なる川として自然の恵を享受しながら人々の暮らしが育んできたことを今に伝えています。



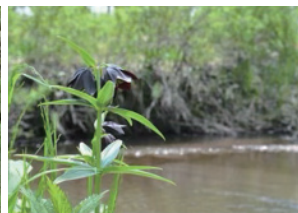
コタンコロカムイ



「千葉大学発掘調査」当幌川遺跡竪穴住居跡



イシカリメム(西竹遺跡湧水地)



クロユリ

標津川とその支流に残る 古代から近世の暮らしを伝える遺跡群

中標津町は、北西部に武佐岳や標津岳などの山岳地帯、南部に根釧台地と呼ばれるゆるやかな起伏のある平坦な台地が続き、南東部は河岸段丘の低地など、変化に富む地形から成り立っています。なかでも中標津市街地は、標津岳を源とする標津川の流れによってつくられた河岸段丘内にあり、主流とその支流の豊かな自然環境が、まちの礎となってきました。

ここに暮らした人々の足跡は、町内に所在する縄文文化～近世アイヌ文化期の遺跡から追うことができます。遺跡は、鮭などの漁業資源が豊富な標津川流域や武佐川、当幌川流域を中心に分布し、地面を掘り下げて作られた「竪穴住居跡」の窪みや、チャシ跡を確認しています。遺跡からは、町内最古の縄文式土器(約6,000年前)をはじめ土器や石器、新しいものではアイヌの人々が使用していた刀や鉄矛、軽石製の火皿が見つかります。特に、町指定文化財である「蛙意匠の土器」(約2,000年前)のような両生類をモチーフとした文様は、道内では数例しか確認されていないもので、文様や形が酷似したものが美幌町でも発見されており、交流があったことをうかがわせます。また、幕末の蝦夷地探検家として著名な松浦武四郎は、調査の際にアイヌの先導を受けながら標津川を舟で遡るなどして、山並みや川沿いに付けられた多くのアイヌ語地名を書き記すと共に、当時のアイヌの人々が暮らしていた様子を聞き取り野帳に記録しており、『東西蝦夷山川地理取調図』や『知床日誌』などの史料から当時の人々の暮らしぶりを知る手掛かりになっています。



中標津町出土蛙意匠の土器



美幌町出土両生類意匠の土器



■ 蛙意匠の土器 有形文化財(美術工芸品)町指定

続縄文時代初頭の土器で、ケネカ川と標津川との合流地点に面する河岸段丘上に所在する西竹遺跡(古代集落遺跡)において発見されました。土器は高さ48cm、口径39cm、底径12cmで深鉢形。口縁部に対で蛙の文様が施されています。

この時期に両生類の意匠のあるものは道内でも数例しか出土しておらず学術上貴重な資料です。



■ 西竹遺跡出土品 有形文化財(美術工芸品)未指定

西竹遺跡は、標津川とケネカ川の合流地点付近に位置し、標津川の右岸、河岸段丘上に100基の竪穴住居跡が所在します。

遺跡からは、北筒式土器や興津式土器、後北C2・D式土器、擦文土器が出土しており、縄文中期より続縄文文化、擦文文化と広範囲に利用されていた古代集落遺跡です。また、遺跡からは、蛙意匠の土器や副葬品(イノシシ牙製の腕輪、貝製首飾り)といった当時の交流を物語る資料が出土しています。



■ 標津川 記念物(名勝地)未指定

町名の「標津」の由来となった川であり、アイヌ語の「シ・ベツ」で「本当の、大きな・川」という意味があり、「シベ・オツ」で鮭が群在する川という意味があります。1892(明治25)年には、町内で最初の公共施設となる鮭鱒孵化場が設置されるなど、古くから人々の暮らしや産業を支える母なる川であり、西別川、風連川に並び根室平野三大河川の1つに数えられています。



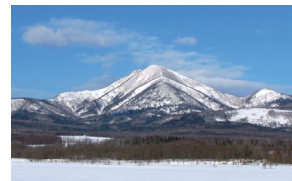
■ 当幌川 記念物(名勝地)未指定

当幌川は、計根別付近の台地から発し、蛇行しながら計根別市街及び中標津市街の南側を東に向かって流れ、野付湾に注いでいます。緩やかな勾配で支流も少なく、流域には手付かずの森林が残されており、動植物層が豊かです。また流域では多くの遺構が確認されています。



■ 武佐岳 記念物(名勝地)未指定

武佐岳は、約50万年前に海底火山の活動によって隆起して形成されたものと言われています。標高1,005m。北海道百名山の1つに数えられており、町域から望むことができる町のシンボルとなっています。(6月第二週に山開き)



■ モアン山 記念物(名勝地)未指定

養老牛地区にある標高365.5mの小さな峰で、当地域の酪農景観を象徴する「牛」文字で著名となり、観光の名所となっています。

また、語源はアイヌ語に由来し、「静かである川」又は「小さな鷺捕り小屋のある川」という意味の説があります。

(放牧地のため5月～10月は立ち入りができません)



■ 中標津2遺跡

標津川の右岸、段丘上の運動公園内にあります。続縄文時代前半期に、釧路地方の文化圏に広く分布する下田ノ沢I式土器(右の画像)と石器が出土しています。そのほか、7世紀後半に石狩低地帯を中心に成立された擦文文化の住居跡と見られる遺構も確認できます。



■ 中標津神社チャシ跡 埋蔵文化財・未指定

中標津市街地に所在し、北側に面した崖に向かってゆるやかなカーブを描く塚があります。



■ 計根別チャシ跡 埋蔵文化財・未指定

ケネカ川の左岸段丘上に所在し、両側は沢の浸食によって削られ、背面に塚を掘り、台地の独立性を高くするつくりとなっています。塚の幅は0.75m～1.5m、深さは0.1m～1m。凡そ200m離れた場所に古代集落遺跡、西竹遺跡が所在します。



■ ケネワッカオイ 地名・未指定

「ケネワッカオイ」とは、アイヌ語で「ハンの木川の・水が・そこに湧いて溜まっている・所」という意味があります。「地下水が何か所からも湧出している所で、ケネカ川はここから水量が増え川幅が狭くなっています。昔の道(斜里山道)は、ここに小休所があり、ここから峠を越えて斜里のワッカオイまでは水がなかったというから、旅人の憩の地であったとも言える」(『中標津町史』より)



※チャシとはアイヌ語で「砦」「城」など、みぞ(塚)で囲われた場所を意味する言葉で、北海道に多く見られる遺構です。

中標津町文化財マップ

凡例

- 遺跡
- 記念物
- 代表的な遺跡
- 山岳林
- 格子状防風林
- 牧草地
- 河川・河畔林
- 市街地・空港等
- 斜里山道
- 町域



※遺跡・記念物等の所在地には私有地も含まれていますので無断での立ち入りを禁止します。※掲載のマップは概略図です。道路、防風林、河川等の位置や形状が、現況と異なる場合がありますのであらかじめご了承ください。

※2025年2月現在、遺跡は72箇所確認しています。